

情報論の先駆者としての福沢諭吉

——「民情一新」をめぐる——

Yukichi Fukuzawa, Pioneer in Information-Conscious Society;
with Particular Reference to his *minjo Isshin*
(The transition of people's way of thinking)

飯 田 賢 一
Kenichi Iida

Résumé

The early history of Keio University Library has been elaborately discussed by Yanosuke Ito and included in the "*History of Keio University Library*" (1972). Ito maintains that the embryonic stage of the Library, beginning in 1858 when Fukuzawa set up his small private school, can be looked upon as a descent of "Doeff's room" at Tekijuku school of Koan Ogata, where Fukuzawa and other students studied European science and medicine via Dutch textbooks. This view is very interesting because it traces and interprets one phase of development of information environment of modernizing Japan.

Not less significant and interesting is to elucidate achievements of Fukuzawa, a distinguished leader of the enlightenment era, from the standpoint of information science, and to point out its modernistic and pioneering characteristics of historical significance, centering on his work entitled "*Minjoissin*" (The transition of people's way of thinking) published 1879.

ま え が き

- I. "聞見博くして勇生ず"
 - II. 諭吉の情報論の原型
 - III. 情報論の基礎
 - IV. 情報環境の不毛
- むすびに代えて —

ま え が き

慶應義塾図書館の生い立ちについては、すでに伊東弥

之助氏による克明な論考があり、「慶應義塾図書館史」
(1972年4月刊)に収められている。ことに1858年(安
政5年)の私塾創設にはじまる慶應義塾の図書室の歩み

飯田賢一：早稲田大学・東京工業大学講師，新日本製鉄㈱調査部資料室長

Kenichi Iida, Lecturer, Waseda University, Tokyo Institute of Technology, Librarian, Nippon Steel Corp.

を、「ゾーフ部屋の流れ」としてとらえ、緒方洪庵の蘭学塾・適塾との連繫において跡づけられているのは、近代日本の新しい情報環境の生成の一断面を語るものとしてまことに興味深い。^{1),2)}

しかし、施設としての図書館ないし図書館の歩みを追究することもさることながら、幕末・明治のわが国第一級の啓蒙思想家、福沢諭吉（1835～1901）の業績を、いわば情報論的な視点から明らかにし、その近代性、先駆的意義を歴史的に掘り起してみることは、きわめて大切な課題の一つだといえるのではあるまいか。

本稿は、このような研究分野が、ほかならぬ慶應義塾大学図書館・情報学科において、いまだ未開拓と思われる状況にかんがみ、ことに諭吉の「民情一新」（1879年）を中心にしながら、あえて論評を試み、ご批判を仰ぐことを目的として成ったものである。

I. “聞見博くして勇生ず”

私はかねて福沢諭吉を、わが国近代情報論の先駆者として理解している者である。これについては、はじめ、専門図書館協議会機関誌「専門図書館」第46号（1971年11月）に発表し、³⁾のちに、小著「近代日本の技術と思想」（1974年7月、東洋経済新報社刊）の冒頭に紹介したことがある。⁴⁾立論上ここにまずその要点を記しておこう。一

日本の近代化の出発点に立って、福沢諭吉は、産業技術の発展と人民の心情の変化、総じて情報環境の変遷の問題について、じつにユニークな書物をあらわしている。「民情一新」（1879年）がそれである。⁵⁾

諭吉はこの書において、西洋諸国の文明開化の基礎をなによりも“その人民交通の便”にあるととらえ、ことに1800年代の“発明工夫”である“蒸気船・蒸気車・電信・印刷・郵便”の進歩こそが、“社会の心情を変動するの利器であり、“人間社会を顛覆するの一挙動”である、と指摘する。そして、“情報”についてつぎのように解釈する。

“語にいわく、「智きわまりて勇生ず」と。余をもつてこの語を解すれば、智とは必ずしも「事物の理を考えて工夫する」の義のみにあらず、「聞見を博くして事物の有様を知る」という意味にも取るべし。すなわち英語に言えばインフォメーションの義に解して可ならん。⁶⁾

諭吉にとって“インフォメーション”という概念が、いかに実践に結びついたものであったか。つづいてかれのいうところをみよう。

“人生かつて聞見せざるることについては、とかくこれに臆して、にわかに進みて取るの気力を生ぜざるものなれども、偶然にこれを聞き、またこれを目撃すれば、思いのほかのものにて、ひとたびこれに取りかかれば、またしたがって工夫もつき、気力も生じて、容易に功を奏するもの多し。”⁷⁾

そこで諭吉はこう古人の語を置きかえて結論づける。すなわち、“聞見博くして勇生ずと言うも可ならん”と。⁸⁾

II. 諭吉の情報論の原型

今日、私たちが一般に広く使っている情報化社会ということばを、脱工業化社会、すなわちポスト・インダストリアル・ソサエティのことと解釈するなら、それは第2次大戦後、ことに1950年代後半のころから急速に進展した技術革新をへた後の社会とするのが正しいであろう。しかし、私たちが社会的に、よりたくましく豊かに生きようとする願いを支え、かつ実現するために必要ないっさいの知識、あるいはその総体が、ほんらい「情報」(information)と呼ばれるべきものであるとするなら、それはもう少なくとも近代社会＝工業化社会の入口のところで、力強い脈動を開始していた、と理解してよいであろう。

私はこのような意味で、情報の大衆伝達への道を築きあげてきた開拓的技術者としての本木昌造（1824～1875）に対して、福沢諭吉を情報論の先駆的思想家ととらえ、わけてもかれの「民情一新」を高く評価するのである。ちなみに長崎のオランダ通詞（通訳）から出発した本木昌造は、情報の技術的な基礎にいち早く注目し、近代社会における最も重要な情報伝達の媒体である印刷技術を確立させた技術者で、みずから金属活字をつくり、活版印刷のための一つのシステムを大成し、さらにその門下とともに1870年（明治3年）12月、わが国最初の日刊新聞「横浜毎日新聞」を創刊し、日本の情報化社会の夜あけを、はじめて技術的に可能した人物である。

さて、諭吉の情報論の原型は、じつは早く1866年（慶應2年）刊行の「西洋事情」初編の“新聞紙”の項にみられる。いわく、

“およそ海内古今の書多しといえども、聞見を博くし、事情を明らかにし、世に処するの道を研究するには、新聞紙を読むに若くものなし。”⁹⁾

しかし、この時点で諭吉の理解がすでに群を抜いているのは、さらにつづいて「ロンドン新聞」などに事例をとり、“新聞紙の報告は速やかなるを趣意とし、蒸気機関

をもって版を摺り、1時間に1万5千枚を得べし。製本終われば、蒸気車・蒸気船等の急便にて諸方に達す。その神速なること人の耳目を驚かす。¹¹⁰”と云って、この情報媒体がひとつの総合的技術、すなわち印刷技術・機械技術・輸送技術などの関連のうえに成り立ち、そのうえにこそ強力な社会的機能を発揮し得ていることを、見抜いていることである。そして、いっぽうではこのように新聞の技術的基礎をとらえつつ、さらにその社説（新聞紙の説）の意義についてふれ、“世人みなこれを重んじ、その大議論によりては一時人心を傾け、政府の評議もこれがため変革することあり¹¹¹”と指摘し、この情報媒体が人のこころ（民情）とどのような関係をもつかを、つぎのように明らかにしていることが注目されるのである。

“譬えばこの国にて師を起こしかの国を攻めんとの評議あるとき、かの国の人、理非曲直を弁論し、これを新聞紙に載せて世上に布告すれば、師をとどむるの一助ともなるべし。¹¹²”

論吉の「西洋事情」が海外の図書館を文庫＝“ビブリオテーキ”ということばで紹介し、“日用の書籍、図画等より古書珍書に至るまで万国の書みな備わり、衆人來たりて随意にこれを読むべし。”¹¹³”と云い、“文庫は政府に属するものあり、國中一般に属するものあり。外国の書はこれを買ひ、自国の書は國中にて新たに出版する者よりその書1部を文庫へ納めしむ。”¹¹⁴と結んでいることは、周知のところでもあろう。

III. 情報論の基礎

人間の知性の問題を技術のことがらとつき合わせて考え、機械文明の進歩のなかに人間の精神文化の発展を洞察したところに、近代啓蒙思想、情報論の先駆者としての論吉の真の偉大さがある、と私は考える。

論吉はもともと若いころから手先が器用で、ものを工夫してつくることに巧みでもあった。

「福翁自伝」の一節にも、

“私は旧藩士族の子供にくらべてみると、手の先の器用なやつで、物の工夫をするようなことが得意でした。たとえば井戸に物が落ちたといえ、どういふ塩梅にしてこれを揚げるとか、箆の錠があかぬといえ、釘の先などをいろいろにまげて、ついにみごとにこれをあけるとかいう工夫をしておもしろがっている。また障子を張ることも器用で、自家の障子はもちろん、親類へ雇われて張りに行くこともあ

る。とにかくに何をすることも手先が器用でママだから、自分にもおもしろかったのでしょう。”¹¹⁵等々とある。

じつは、かれのこのような体験が、小泉信三博士も指摘されるように、“福澤の興味と注意とを特殊の方向に向って、すなわち生産技術、労働用具、生産原料に向って鋭くさせた¹¹⁶”のであって、西洋科学受けいれの素地を助け、またほんとうの技術とは何かということ、身をもって体得させてくれていたのである。論吉の啓蒙思想家としての出発が、「増訂華英通語」(1860年)や「西洋事情」(1866年)などとならんで、物理の初等テキストとしての「訓蒙窮理図解」(1868)年にあったことは、今日では多く知られている。

論吉は「窮理図解」の序に、かれの基本的立場を、つぎのように披歴している。

“苟にも人としてこの世に生れなば、よく心を用ひて何事にも大小輕重に拘はらず、先づ其物を知り其理を窮め、一事一物も捨置くべからず。物の理に暗ければ身の養生も出来ず、親の病氣に介抱の道も分らず、子を育るに教の方便もなし。人の多きも、之に交る道を知らざれば、我一人の外、人なきが如く、世界の廣きも、其人情風俗に通ぜざれば、我一人の外、世界なきが如し。……

或は又昔容儀の学者・先生か、君子は細行を勤ず、遠を致さば泥まんことを恐るなどと、古人の言を證據に持出して、兎角物事を粗略にし、窮理の學などは、為して害あることのよふにいふものも、間少からず、こは己が田に水を引くといふものにて、勝手に任せ事を少くして身を楽にせんとする趣向なるべし。されども人は木石にあらず。木か石ならば用て損ずることもあるべきなれども、人の身體は働くほど強くなり、人の精心は用るほど達者になるものなれば、假令ひ細行にもせよ小道にもせよ、知識を研くに益あれば、これを等閑にすべけんや。然るを儒夫の口吻に、仁義道德を修るなどと口先ばかりの説にては、人間の職分を尽したりといふべからず。況て人に知識なくば己が仁義道德の鑒定も出来まじ。知識なきの極は恥を知らざるに至る。恐るべきことならずや。”¹¹⁷

論吉にとって、“無形の学問”＝心学・神学・理学（哲学）なども、“有形の学問”＝天文・地理・窮理・化学なども、みな“知識見聞の領分を広くして、物事の道理をわきまえ、人たる者の職分を知ること”において、同じものであり、いずれも実践に結びつくものでなくてはな

らなかつた。かれの「学問のすすめ」二編（1873年刊）の冒頭のことは、この意味で諭吉の情報論の思想的基礎をなしている。いわく、

“知識見聞を開くためには、或は人の言を聞き、或は自から工夫を運らし、或は書物をも讀まざる可らず。故に學問には文字を知ること必用なれども、古來世の人の思ふ如く、唯文字を讀むのみを以て學問とするは大なる心得違なり。

文字は學問をするための道具にて、譬へば家を建るに槌鋸の入用なるが如し。槌鋸は普請に缺く可らざる道具なれども、其道具の名を知るのみにて家を建ることを知らざる者はこれを大工と云ふ可らず。正しくこの譯にて、文字を讀むことのみを知て物事の道理を辨へざる者は、これを學者と云ふ可らず。”¹⁸⁾

「学問のすすめ」には、同主旨の論考がなおいくたびか展開され、慶應義塾の“社中”の者によびかけられている。

“抑も人の勇力は唯讀書のみに由て得べきものに非ず。讀書は學問の術なり、學問は事をなすの術なり。實地に接して事に慣るゝに非ざれば決して勇力を生ず可らず。我社中既に其術を得たる者は、貧苦を忍び艱難を冒して、其所得の知見を文明の事實に施さざる可らず。”¹⁹⁾（五編，1874年刊）

“學問の本趣意は讀書のみに非ずして、精神の働きに在り。此働きを活用して實地に施すには様々の工夫なかる可らず。……即ち視察、推究、讀書は以て智見を集め、談話は以て智見を交易し、著書演説は以て智見を散ずるの術なり。然り而して此諸術のうち、或は一人の私を以て能す可きものありと雖ども、談話と演説とに至りては必ずしも人共にせざるを得ず。演説会の要用なること以て知る可きなり。”²⁰⁾（十二編，1874年刊）

——諭吉が1875年（明治8年）三田山上に建てた演説館は、この考えにもとづくものである。

知性と技術（工夫）とを実践的に関連づけてゆく諭吉の思想は、“文明論とは人の精神発達の議論なり”²¹⁾とする「文明論の概略」（1875年）において、歴史的にさらに掘り下げられ、実証性を獲得する。ヨーロッパ近代哲学の父、カントは、なんじ自身の知性を使用する勇氣をもて、というのが啓蒙の標語である²²⁾といつてのけたが、私は「文明論の概略」のつぎのことばをみると、まさしく近代文明の精神が主体的にみなぎり、新しい情報化社会の夜明けがはじまったことを知るのである。諭吉は

いう。

“ワットが蒸氣機關を發明し、アダム・スミスが經濟論を首唱したるも、黙居獨坐、一旦豁然として悟道したるに非ず、積年有形の理學を研究して、其功績漸く事實に顯はれたるものなり。達磨大師をして、面壁九十年ならしむるも蒸氣電信の發明はある可らず。……故に云く、智恵は學て進む可し、學ばざれば進む可らず、既に學て之を得れば又退くことある可らず。”²³⁾

思うに、文明の根本は人の精神のはたらきを活発にすることにありと説き、西欧文明の摂取にさいして、外面的な制度よりも、文明の精神を重視すべきことを強調した「文明論の概略」の発想は、情報（information）の概念を得た「民情一新」において、その実践的な基礎を確立し、“聞見博くして勇生ず”という行動理念となった、と諭吉の仕事を評価してよいであろう。

“古來世に發明工夫はなほだ少なからず。天文、化学、器械学等、いずれも時代に従つて面目を改めたるは讀書によりてこれを知るべし。古は地動の説、元素の發明、火器の製造より、近代には種痘、ガス灯、紡績器械等、そのもっともいちじるしきものにして、功德もまた僅少なからずといへども、およそその実用のもっとも広くして社会の全面に直接の影響を及ぼし、人類肉体の禍福のみならず、その内部の精神を動かして智徳の有様をも一変したるものは、蒸氣船車、電信の發明と、郵便、印刷の工夫、これなり。”²⁴⁾

——諭吉は「民情一新」においてこの4つの發明・工夫を基本的概念としてとらえ、“しこうして今、人の聞見を博くするがためにもっとも有力にして、その働きのもっとも広大なるものは、印刷と郵便の右に出ずるものあるべからず。”²⁵⁾とした。

そして、この“社会の心情を變動するの利器”の役割についてつぎのように結論づけたのである。

“我はすでに蒸氣の働きによってわが国を開き、開国のはじめにその機能を知り、またしたがって、この蒸氣および電信等をわが国に入れたり。ゆえにわが開国は単に外国の人を入れたるにあらずして、外国に發明工夫したる、社会活動の利器を入れたるものなり。すでにこの利器を入れてこれを用うるときは、わが開国の一挙はただ外国と日本と相對するその關係の變化のみにとどまらずして、日本國中自家の變動を生ぜざるを得ず。結局わが社会は、今後この利器とともに動かして進むものと知るべし。”²⁶⁾

IV. 情報環境の不毛

—むすびに代えて—

社会発展の基礎にコミュニケーション手段の発達(「人民交通の便」と、それを駆使する人間の知力を据え、しかもそのコミュニケーション手段の原動力に“蒸気の働き”を位置づけたこと、これが「民情一新」における論吉の発想の特徴である。それは同時にすぐれた文明論であり、情報論であった、と私は考える。技術の問題と人間知性の問題を関連づけてとらえる発想は、たとえばイギリスのフランシス・ベーコンの思想、あるいはフランスの啓蒙思想と軌を一にするものであり、それ自体世界史的性格をもっている。²⁷⁾ 世界の新しい情報環境はまさしくこのような路線によって開かれたと私は理解する。しかし、残念なことに論吉が先駆的に開拓した情報論の芽はその後、わが国では順調に育つことがなかった。

1873年(明治6年)論吉は、森有礼、加藤弘之、西周、中村正直、津田真道、神田孝平、箕作秋坪ら、当時のわが国有数の知識人たちと明六社を結成し、「明六雑誌」などを通じて、啓蒙思想運動を展開した。明六社の目的とするところは“文学・技術・物理・事理等、凡ソ人ノ才能ヲ富マン、品行ヲ進ムルニ要ナル事柄”²⁸⁾ といったを論じ、民衆の知力を増進し、将来への知見を得るにあり、まったく論吉の開いてきた軌道に沿うものであった。ところが、1875年(明治8年)6月に「讒謗律」および「新聞紙条例」が公布され、明治政府による出版物の取締りの強化がはじまった。論吉をはじめ民選議院設立尚早論者が多数を占める明六社さえも、その取締りの対象となり、同年はやくも明六社は機関誌「明六雑誌」を廃刊し、やがて解散するにいたった。

「民情一新」の刊行された1879年(明治12年)は、じつは国会開設運動をも含めて、政府と民間の諸勢力との間に対立がつついていた時代であった。明治政府すでに反動の色を濃くしていた。論吉はその「覚書」につきのような文をのこしている。

“明治九年三月中、文部省の學校にて生徒を打つを教師に許したりとの事あり。其前明治八年六月二十八日には、新聞條令〔例〕讒謗律の發行あり。新政府の初より六、七年の間は少し自由に過ぎたることあるに似たりしが、一寸爰に反動の模様を顯はしたり。”²⁹⁾ かつて論吉が新しい社会をつくるための強力な手段として望みを託した“新聞”は、そのころどう変化して

いったか。「覚書」にかればこうも記している。

“東京の諸新聞屋は、當時警視局と云ふ内務省の別役所にて、一々雑報の草案を改め、局の許可を経て後に紙に記するの法なり。…又東京日々新聞なるものは役人共と少しく縁ある様子にて、常に政府の都合よき様に書く僻[癖]あるが、其日々新聞今朝の説に、熊本も馬鹿らしく永く籠城するには及ばずなど、少しにげ口上あり。左すれば熊本も眞に落城か、或は唯の風聞か、何れにも事實は少しも分らず。狭き日本に郵便も電信もある其中に、數千人の籠れる一大城が落たか落ちぬか、一週日の間も眞偽不分明とは、奇も亦甚しと云ふ可し。今日の有様にては假令ひ政府より熊本の籠城鎚なりと布告するも、人民は信ずるものなし。政府の事を秘するは、ごへいかつぎが死四志芝の字を嫌ふが如し。一昨年明治八年六月廿八日新聞条令讒謗律なる法を設けて、徒に官の名望を失したり。即ち此度の我事も其魂の在る所は同様なり。併し此魂は今の役人に限らず、日本の政府に固有のものなれば、人民自治の氣象を生ずるまでは政治上に望なし。筆を闕して当世を論ずること勿れ。正に是れ小兒の一乾坤のみ。明治十年三月二十日午前記して老後の備考と爲す。”³⁰⁾

「民情一新」は日本の情報化社会の夜あけに生まれたすぐれた啓蒙の書であるが、それが刊行されたとき、すでにその夜あけをこぼもうとする圧力が日本の社会のしかかりはじめていたのである。

論吉はこの年(1879年)1月、東京学士院(のちの帝国学士院、日本学士院)の設立とともに、その初代会長に選ばれた。このとき前記明六社の人びとから西・加藤・神田・津田・中村・箕作らが会員となつて、“學術技芸”に対する高見を披歴することとなったが、このなかに論吉のように“蒸気船・車、電信、印刷、郵便の四者は1800年代の發明工夫にして、社会の心情を變動するの利器なり”³¹⁾と、物理(技術)と知性との結びつきにおいて、新しい情報環境の創造を進めてゆこうとする学者は、ひとりもいなかった。

晩年に近い論吉の著作「実業論」(1893年)では、かれは日本は“無形精神上の進歩のみ”が目だち、“有形実物上の有様”の動きはまだいたって鈍いと指摘し、“畢竟するに我士族流が數百年來遺傳の教育に磨きたる智識を以て西洋の文明に應じ、唯其の旧智識の形を変じて新智識の姿に移りたるまでにして、特に創めて智識を造りたるに非ず”³²⁾と慨嘆せざるをえなかった。

私の恩師 三枝博音博士は、「重荷がかかりすぎた福沢

情報論の先駆者としての福沢諭吉

諭吉について」という小文を、諭吉全集第15巻の月報に寄せ、「明治変革のあと 20 何年、日本がけっきょくなしとげ得たことは何だったか。福沢ほどに身をもってこれを体験した人はそう沢山いなかったろう。」「³⁰⁾と記し、つぎのように近代日本の情報環境の不毛を指摘されている。

「私はこうした点で、彼よりも九十年も前に生れて、数学や外国語（オランダ語）ができ、水陸海の交通や国土の開発や機械技術についてあらゆる献策と啓蒙活動をした本多利明のような人の先見の明と実行とが、日本の文綵文綺の文明の一辺的發展に吸い消されてしまったことを考えさせられ、なおいっそう福沢が「実学」の開拓にしはらった努力の不生産を想わないではいられない。」「³⁴⁾

近年 専門図書館協議会研究報告の一環として、「海外主要国の専門図書館」を編集し、³⁵⁾ 欧米先進国と日本との情報環境の格差を知るにつけ、私はこれからの日本の情報環境の創造にいかん図書館人・情報管理者が奇与すべきかを想ってみるのであるが、いわゆる文明開化期に先駆的な情報論を展開した福沢諭吉に学ぶべきところが大きいことを、あらためて反省させられざるをえないのである。

- 1) 伊東弥之助. 「慶應義塾図書館史 その1 ゴーフ部屋の流れ,」 *KULIC*, no. 2, 1971. 6, p. 12-15.
- 2) ————. 「慶應義塾図書館史 その2 新銭座から三田へ,」 *KULIC*, no. 3, 1971. 11, p. 23-27.
- 3) 飯田賢一. 「情報環境の変化とドキュメンテーション—その産業技術史的研究序説—,」 専門図書館, no. 46, 1971, p. 36-37.
- 4) ————. 近代日本の技術と思想. 東洋経済新報社, 1974. 283p.
- 5) 永井道雄. 日本の名著33 福沢諭吉. 中央公論社, 1969. 510p.
- 6) *Ibid.*, p. 442-443.
- 7) *Ibid.*, p. 443.
- 8) *Ibid.*, p. 443.
- 9) *Ibid.*, p. 370.
- 10) *Ibid.*, p. 370.
- 11) *Ibid.*, p. 371.
- 12) *Ibid.*, p. 371.
- 13) *Ibid.*, p. 371.
- 14) *Ibid.*, p. 371.
- 15) *Ibid.*, p. 240.
- 16) 小泉信三. 福沢諭吉. 岩波書店, 1968. p. 250.
- 17) 慶應義塾. 福沢諭吉合集 第2巻, 岩波書店, 1969. p. 235-6.
- 18) *Ibid.*, 第3巻, p. 36.
- 19) *Ibid.*, 第3巻, p. 61-2.
- 20) *Ibid.*, 第3巻, p. 103.
- 21) 永井道雄. *op. cit.*, p. 149.
- 22) Kant, I. 豊川昇訳, 啓蒙とは何ぞや. 創文社, 1948. p. 3. ただし, *verstand* を「悟性」でなく知性と訳した.
- 23) 慶應義塾, *op. cit.*, 第4巻, p. 98.
- 24) 永井道雄, *op. cit.*, p. 440-441.
- 25) *Ibid.*, p. 443.
- 26) *Ibid.*, p. 446.
- 27) 飯田賢一, *op. cit.* なお飯田賢一. 「新しい情報環境創造の世界史的考察,」 専門図書館, no. 50, 1972, p. 21-31 も参照されたい.
- 28) 吉野作造編. 明治文化全集. 第18巻. 日本評論社, 1928. p. 199.
- 29) 慶應義塾, *op. cit.*, 第7巻, p. 667.
- 30) 慶應義塾, *op. cit.*, 第6巻, p. 148.
- 31) 永井道雄, *op. cit.*, p. 440.
- 32) 林 達夫, 吉田光邦, 飯田賢一. 三枝博音著作集 第5巻. 中央公論社, 1972. p. 474.
- 33) 慶應義塾, *op. cit.*, 第15巻付録, p. 1-2.
- 34) 慶應義塾, *op. cit.*, 第15巻付録, p. 2.
- 35) 専門図書館協議会. 海外主要国の専門図書館. 1976. 82p.